

『致富新論訳解』(1875)が経済を説明した ことばについて

塩山正純

要旨 ブラウン著とされる『致富新書』(1847)(以下『新書』と略記)の訓点本が1871年に出版され(以下、訓点本と呼ぶ)、さらにその和訳本として『致富新論訳解』(以下『訳解』と略記)が1875年に出版された。『訳解』では、訳者である漢学者中島雄と讚井逸三が、経済に関する様々な概念、事象を説明するために、原書や訓点本で使われた漢語をベースにして、新たな漢字語を加え、さらにこれら漢語、漢字語には和語をもとにしたルビもふつた。『新書』と『訳解』の原書は McVickar, John (1837) *First Lessons in Political Economy* であり、同じく明治初期の何礼之による『世渡りの杖』からの引用も散見される。和訳本『訳解』が「経済」を説明する際には、日本語を母語とする読者に馴染みのある漢字語が多用され、漢字語の音訓と漢字語と同義の和語の発音で振られたルビも多用されている。

キーワード 致富新論訳解 翻訳語 経済学書の翻訳 致富新書 ブラウン 鮑留雲

《致富新論译解》说明“经济”的词语

提要 Samuel Robbins Brown (中文名: 鮑留雲) 是从19世纪中叶至20世纪初在中国和日本从事传教、教育、翻译工作的美国传教士。鮑留雲1847年出版了一本经济学入门书《致富新书》(《新书》)之后,在日本国内,1871年出版了其翻刻本(训点本),1875年由当时日本的汉学家中岛雄和讚井逸三出版了日译本《致富新论译解》(《译解》),《译解》为了说明关于西洋经济学的概念和各种事项,以《新书》及训点本所使用的汉字词语为基础,加上其独自の汉字词语,按照汉字的日本读音把主要的词语的右侧添上片假名,还在主要词语

の左边添上表示日语原有的有关词语（和语）の発音の片假名。本文估计《新书》和《译解》の原典は美国的 McVickar, John 在1837年出版の *First Lessons in Political Economy*。明治時代早期還有何礼之《世渡之杖》等关于西洋経済学の翻译书，《译解》偶尔有引用于何礼之《世渡之杖》の表现。作为日译本の《译解》解释“经济”时，多用日本读者所熟识の汉字词语，同时为了给读者提供方便，还在汉字词语の两侧附上表示这些词语の発音（音训）和日语同义词の発音の片假名。

关键词 致富新论译解 翻译词 经济学书的翻译 致富新书 鲍留云

1. ブラウンと漢訳書『致富新書』

サミュエル・ロビンス・ブラウン (Samuel Robbins Brown, 1810–1880, 以下：ブラウン) は19世紀に中国、日本で活動したキリスト教宣教師である。ブラウンの年譜についてはすでにグリフィス (1985)、中島 (2015)、王 (2016) 等の先行研究による詳しい紹介があることから、本稿ではとりたてて記述しない¹⁾。

ブラウンの著作とされる漢訳書『致富新書』(以下：『新書』)は、1847年に香港で出版された西洋経済学の入門書である。複数の先行研究が、『新書』が中国語による書き下ろしではなく、成書の過程に中国人との協働があり、英語原典が存在すると言及している。まず、Casalin (2006) は原典そのものには言及していないものの、『新書』がブラウン単独ではなく、彼の中国人学生との協働の成果である可能性を指摘している²⁾。さらに、呉 (2011)、王 (2016) は、John McVickar が著した経済学の教科書で1825年に

1) グリフィス (1985) は、ブラウンの日本時代をともに過ごし親交の深かったグリフィスにより1902年に出版された伝記 *A Maker of the New Orient Samuel Robbins Brown Pioneer Educator in China, America, and Japan. The Story of his Life and Work* の和訳である。また、小澤 (1939) も同じく近代に中国・日本で活動した宣教師ネヴィアス夫妻の日本との関係を記述する中で、ネヴィアス夫妻が神奈川の成仏寺に滞在した際にブラウンが同じ屋敷内に滞在していたことに言及している。

2) Casalin (2006: 85–86).

『致富新論訳解』(1875)が経済を説明したことばについて

出版された *Outlines of Political Economy being a Republication of the Article upon that Subject Contained in the Edinburgh Supplement to the Encyclopedia Britannica* (以下：*Outlines*) が原典である可能性が高く、原典のエッセンスを抽出して抄訳したものである可能性を指摘している³⁾。しかし、王(2016)も言及しているように原典は188頁の大部であり、さらに章立ての構成も『新書』のそれとは大きな差異がある。*Outlines*の著者であるJohn McVickarには、これとは別に1837年に *First Lessons in Political Economy, for the use of Primary and Common Schools, Common School Depository* (以下：*First Lessons*) なる経済学入門書も著しており、同書は1846年には第7版が出るなど版を重ねた。*First Lessons*も *Outlines*と同様に、本文の総ページ数が105頁と少なくはないが、3.1の表1に示すように、章立てには若干の異同があるものの基本的には順序、章タイトルの意味ともに『新書』とほぼ一致しており、*First Lessons*のほうが『新書』の原典である可能性が高いと考えられる。なお、同じく表1に示す通り、順序、章タイトルの意味は後述する『訳解』の章立てもこれに一致する。

2. 訓点本『致富新書』

日本国内では、さらに平田宗敬による『新書』の訓点本が1871年に東京書肆鈴木喜右衛門によって出版されているが(以下：訓点本)⁴⁾、この訓点本は章立てが漢訳書『致富新書』に一致する。

また、孫(2015)も指摘するように、訓点本序文二葉表に「原本係于謄寫、不免牡丹無千歲之誤」との文言があり、漢訳書の版本ではなく写本をも

3) 呉(2011: 91-92)及び王(2016: 36-37)。

4) 訓点本(平田宗敬校(1871)『致富新書』)の封面に「東京篠簪軒藏」、奥付に「東京書肆鈴木喜右衛門」の記載がある。平田宗敬については、Webcat Plusによると生年不詳、1890年没、『致富新書』(明治4年)のほか『蕪文忠公詩集擇粹』(文久3年)、『潜鞭録』(明治34年)、『百科全書国民統計学』(明治10年)の編訳の共単著があり、平田虚舟、平田一郎、平田敬、簡夫、虚舟、宝善楼といった別名がある(<http://webcatplus.nii.ac.jp/webcatplus/details/creator/250373.html> 閲覧日2022年12月30日)。

とに訓点を付したと述べているが⁵⁾、本文の文言は基本的に漢訳書『致富新書』と一致しており、原書の文言を正確に筆写した質の高い写本が用いられたであろうことが窺える。

例えば、本文の第一章「論用銀格」冒頭を見てみると、『新書』本文の「夫銀之為用於天下也大矣哉、上棟下宇者、銀也。重裨疊褥者、亦銀也。」に対して、訓点本は「夫銀之為_レ用於_レ天下_レ也大矣哉、上_レ棟下_レ宇者銀也、重裨疊褥者亦銀也、」である。また、第二章「論百工交易」冒頭は、『新書』本文の「且人何不自為械器、而無待與百工交易乎、其所以不自為械器者、非無故也、」に対して「且人何不_レ自為_レ械器_レ而無_レ待_レ與_レ百工_レ交易_レ乎、其所_レ以不_レ自為_レ械器_レ者、非_レ無_レ故也。」(筆者網掛け)である。いずれも訓点本は基本的に原書である『新書』の同一の本文に訓点を付して、句読点をアレンジしたものであることが分かる。

3. 和訳本『致富新論訳解』

さらに1875年に漢訳書『致富新書』の和訳本としての『致富新論訳解』(以下：『訳解』)が出版された。『訳解』は、訳者である漢学者中島雄と讚井逸三が⁶⁾、経済に関する様々な概念、事象を説明するために、原書や訓点本で使われた漢語をベースにして、新たな漢字語を加え、さらにこれら漢語、漢字語には和語をもとにしたルビを付したものである。同じく明治初期には、何礼之による『世渡りの杖』や、小幡篤次郎による『英氏経済論』、神田孝平による『経済小学』など西洋の経済学書の翻訳が相次いで出版されている。本節では『致富新書』の和訳本『訳解』の漢語、漢字語、ルビに着目

5) 孫 (2015: 237)。

6) 中島雄は1853年生まれ、1910年没の漢学者で、中村正直のもとで同人誌『同人社文学雑誌』の編集をつとめ、清国・北京公使館での勤務歴がある(デジタル版日本人名大辞典+Plus <https://kotobank.jp/word/中島雄-1096604> 閲覧日2022年12月30日)。讚井逸三は生没年不詳ながら、『訳解』以外に『米英仏独魯埃蘭国勢袖鑑』(明治5年)、『道德保安条例』(明治21年)、『和山遊記』(明治26年)等の著訳がある(<http://webcatplus.nii.ac.jp/#/18560438211> 閲覧日2022年12月30日)。

し、同時代資料の表現とも比較対照しつつ、和訳本『訳解』が「経済」を説明する際に用いたことばの特徴について考察する⁷⁾。『訳解』出版の時代背景や動機については、すでに孫(2015)、王(2016)が『訳解』の序文、例言などからその大凡のところに言及していることから本稿では扱わず、『訳解』上編、中編、下編の全三冊のうち原書である『新書』の「論用銀格、論百工交易、論商事、其二、論貿易、論工藝」にあたる部分である上編の「金銀ヲ用フル道ヲ論ス、百工ノ交易スルヲ論ス、商事ヲ論ス、其二、貿易ヲ論ス、工藝ヲ論ス」を考察の範囲とし⁸⁾、とくに第二章「百工ノ交易スルヲ論ス」を中心に、翻訳の特徴について見ていきたい。

3.1 和訳本『致富新論訳解』の章タイトルの翻訳

以下の表1に示す通り、筆者が原書と見立てる *First Lessons* の章立ては全19章であり、『新書』は19番目の章を2分割して形式上は20章になっているが、章立てそのものは *First Lessons* と完全に一致している。『新書』の章タイトルには動詞としての「論(ヲ論ス)」が付く。例えば第二章のタイトル原書“Lesson II. Exchanges.”を、『新書』、訓点本は「論百工交易」とし、『訳解』は読み下して「百工ノ交易スルヲ論ス」とする。『新書』、訓点本と和訳本である『訳解』のタイトルの意味は原書のそれと完全に一致している。『新書』と『訳解』のタイトルについて見てみると、「論用銀格」に「道ヲ」を加えて「金銀ヲ用フル道ヲ論ス」とするものと、「貧富分業」に「ヲ論ス」を加えて「貧富ノ分業ヲ論ス」とするものの計2例で、表現の一部が相違するものの、全19章のタイトルは基本的に *First Lessons* を忠実に漢訳した『新書』をさらに『訳解』が読み下して踏襲している。一方で、和訳本『訳解』の本文の翻訳については、原書である『新書』、さらにその原書であ

7) 本稿はアメリカ人宣教師ブラウン著『致富新書』の和訳本である『訳解』が経済を説明する翻訳の特徴に焦点を当てているが、本特集では、朱鳳、千葉謙悟、奥村佳代子による各論文が、ブラウンの活動のネットワーク、『致富新書』から『訳解』に至る翻訳の特徴について考察している。

8) 漢訳書『致富新書』一冊56葉の内容を、『訳解』は三冊に分割している。

る *First Lessons* と主題と大筋の内容については一致するところも多々あるが、例の提示や単語レベルでは全く様子の違うものになっている。

表 1

掲載順	<i>First Lessons</i> (1837, 1847)	『致富新書』	『致富新論訳解』
1	Money	論用銀格	金銀ヲ用フル道ヲ論ス
2	Exchanges	論百工交易	百工ノ交易スルヲ論ス
3	Commerce	論商事	商事ヲ論ス
		其二	其二
4	Merchant section I.	論貿易	貿易ヲ論ス
	section II.		
5	Manufacturer	論工藝	工藝ヲ論ス
6	Farmer	論農工商賈	農工商賈ヲ論ス
7	Lawyar, Physician and Chergyman	其二	其二
8	Land	論土地	土地ヲ論ス
9	Rich and poor	貧富分業	貧富ノ分業ヲ論ス
10	Productive and Unproductive	論用銀益人	銀ヲ用ヒ人ニ益スルヲ論ス
11	Value	論物貴重	物ノ貴重ヲ論ス
12	Price	論市價	市價ヲ論ス
13	Cheap	論平賤	平賤ヲ論ス
14	Government	公務	公務
15	Education	學業	學業
16	The Poor	貧約	貧約
17	Lotteries	論求財	財ヲ求ムルヲ論ス
		並處世良規	
18	How to make money	論銀用	用銀ヲ論ス
19	How to use money	論用銀例	

3.2 和訳本『致富新論訳解』は原書本文のどれだけを訳出しているか

孫 (2015) も指摘するように、『訳解』「例言」は「翻譯ノ主意ハ原書ノ旨義ヲ失ハザルヲ要トス故ニ今此書ヲ譯スル寧ロ拘泥ニ失ストモ敢テ浮泛ノ

語ヲ用ヒズ讀者之ヲ諒セヨ」と述べて、原文を忠実に翻訳する方針を打ち出しているが⁹⁾、この例言で謂うところの「原書」とは漢訳書『新書』を指す。さらにその原書と筆者が見立てる *First Lessons* との継承関係はどうなっているか、ということを見るために *First Lessons* の“Lesson II. Exchanges.”と漢訳書『新書』と和訳本の『訳解』第二章の本文とを並べて比較してみる。

3. 2. 1 英文原書 *First Lessons* の表現が比較的引き継がれている部分

和訳本『訳解』の第二章冒頭の三つの文に該当する部分について、原書 *First Lessons*、『新書』、『訳解』(それぞれ〈原〉、〈新〉、〈訳〉と略記)の本文を比べてみると以下のようなになる。

(1) 第二章第一文

〈原〉 1. “But why should not each man make what he wants for himself, without going to his neighbor’s to buy it?”

〈新〉 且人何不自為械器、而無待與百工交易乎。其所以不自為械器者、非無故也。

〈訳〉 江湖(セケン)ノ人人何故(ナニユヘ)ニ自分自身ニ所用ノ物品ヲ作りテ相互ニ交易スルコトヲ廢セズヤト云フニコレソノ謂(ワケ)アルコトニテ

原書の英文に該当するのは、『新書』では前半部分であり、後半の「其所以下は同趣旨を重ねて説明したものである。『訳解』についても、上述の『新書』の後半部分に該当する文言がみられる。また、個別の語彙についても、原書の英文の“each man”を、『新書』は文体が文言であるために単に「人」とするが、『訳解』はさらに説明の語彙を付加して「江湖(セケン)ノ人人」としている。

(2) 第二章第二文

〈原〉 Go into the shoemaker’s shop, and ask him why he does not make tables and chairs for himself, and hats, and coats, and every thing he wants.

〈新〉 設往為屨者之家、問彼何不自為枱椅衣冠、並備百物之用乎。

9) 孫 (2015: 240–241)。

〈訳〉今譬（タト）へハ鞋匠（クツシ）ノ行（ミセ）ニユキ貴公ハ何故ニ椅子（イス）帽子（バウシ）ヲ首トシテ貴公自身ニ用フル凡百（モロモロ）ノ物品ヲ製造セヌヤト問フナレバ

原書の英文の“the shoemaker’s shop”を、『新書』は「為屨者之家」とするが、「為屨者」は熟した単語とは言い難く、また“s shop”も「之家」としており、店の意味を分かり易く表現しているとは言えない。一方で、『訳解』は「鞋匠（クツシ）ノ行（ミセ）」とし、“shoe”の訳語として文言的な『新書』の「屨」を踏襲せず、また現代日本語に通じる「靴」ではなく「鞋」を採っている。右訓による補足があるものの、原書の意味をより明確に表している。

(3) 第二章第三文

〈原〉 He will tell you that he must have a complete set of joiner’s tools to make one chair properly; the same tools as would serve to make hundreds of chairs.

〈新〉 彼將曰、夫人之造椅、必須規矩以為方圓、並要斧鋸而皆具備、其所以然者、為造椅之久計耳；然造百椅者、必須器具之齊、即造一椅者、亦要器具之備、

〈訳〉 鞋匠ノ對（コタヘ）二人ノ椅子ヲ作ルニハ必ス規矩（キク）ヲ以テソノ方圓（ハウエン）ヲ制シ斧（オノ）鋸（ノコギリ）ヲ以テソノ斬截（ザンセツ）ヲ為シ又帽子ヲ作ルニハ糸（イト）針（ハリ）ヲ首トシテ夫夫（ソレソレ）ノ器械（キカイ）アリ

原書 *First Lessons* の文意は「椅子を1脚作るためには、数百脚の椅子を作るのと同じように、建具の道具を一式揃えなければならない」で極めて単純明快であるが、漢訳書『新書』ではこれに具体的な説明の要素が付加されている。『訳解』では具体的な説明の要素を付加する傾向がより顕著になり、網掛け部分は *First Lessons* と『新書』の椅子の具体例にさらに帽子の例を加えたものである。囲みの語彙は『新書』と『訳解』が共に用いており、『新書』の語彙をそのまま『訳解』が踏襲したものと考えられる。

英文原書 *First Lessons* の“Lesson II. Exchanges.”の本文は合計25の文からな

る。『新書』は *First Lessons* の本文について逐語訳的であるか意識的であるかという翻訳スタイルの差はさておき全ての部分を翻訳しているが、『訳解』は、19～21番目の文に該当するはずの3つの部分が欠落している。翻訳されている部分については基本的に、『新書』は原書が伝えようとしている内容をほぼ正確に拾って文言で表現しており、『訳解』はさらにキーワードとなる語彙を日本人に馴染みのある語彙に置き換える一手間が施されている。また、*First Lessons* は経済学のテキストとしての性格から、各章末尾に内容に関する「問い」が付されており、第二章でも“Why should not each man make what he wants for himself?”や“What is the better course, and why?”などの問いがあるが、『新書』、訓点本、『訳解』はいずれもこの各章末尾の問いを採用していない。

3.2.2 英文原書 *First Lessons* の表現が大幅にアレンジされている部分

前節では英文原書 *First Lessons* の“Lesson II. Exchanges.”の冒頭に該当する部分を例に、英文原書の本文が漢訳書『新書』と和訳本『訳解』で比較的忠実に訳出されている例を扱ったが、本節では *First Lessons* の“Lesson I. Money.”冒頭を例に、原書 *First Lessons* 各章の話題の大意は保ちつつ¹⁰⁾、漢訳書『新書』と和訳本『訳解』がそれぞれ小さいものでは語彙単位で、大きいものでは例としての話題の変更などで大幅な変更を加えて訳出している箇所について、英文原書 *First Lessons*、『新書』、『訳解』の本文を比べてみると以下ようになる。

(4) 第一章第一段

〈原〉 What a useful thing is money! If there were no such thing as money, we should be much at a loss to get anything we might want. The shoemaker, for instance, who might want bread, and meat, and beer, for his family, would have nothing to give in exchange but shoes. He must go to the baker and offer him a pair of shoes for as much bread as they were worth; and he must do the same

10) 3.1表1に示す通り、章立てとタイトル *First Lessons*、漢訳書『新書』、和訳本『訳解』の各章が記述している話題は同一のものである。

thing if he went to the butcher for meat, or to the brewer for beer.

〈新〉夫銀之為用於天下也大矣哉、上棟下宇者、銀也。重綱疊褥者、亦銀也。即食前方丈；僮僕滿前者；又銀以為之也。此天下之人莫不資銀以應日用之事。使天下而並無銀也。則人將何以沽物乎。如業履者、欲市膏粱而沽蔬肉、則即以履而易之、故必以履向市粟之人、論履之多寡而易之矣。即沽蔬肉者亦然。

〈訳〉金銀ノ用ヲ世間（セケン）ニナスコトハ至便（シベン）ナルモノニテ人人家屋ニ住（スマ）ヒ被衾（ヒキン | ヨギフトン）ニ寝（イヌ）ルモ金銀ニヨル多（オホク）ノ鼎俎（テイソ | ゼンブ）ニ飲食シ許多（アマタ）ノ奴僕（ドボク）婢女（ヒヂヨ）ヲ使令（シレイ | メシツカフ）スルモ又金銀ニヨルソノ他世間（セケン）日用（ニチイヨウ）ノ諸萬事（シヨバンジ）一モ是ニヨラサルモノナシ苟モコレヲ欠トキハ人人何ヲ以テ銘銘（メイメイ）須用（シユイヨウ | イリイヨウ）ノ物品ヲ買ヒ得ヘキヤ假令（タトヘ）ハ鞋匠（アイシヨウ）米粟（ベイソク）蔬肉（ソニク）ヲ買ント欲シソノ製造セシ鞋（クツ）ヲ以テ米粟蔬肉ヲ業トスルモノノ許ヘユキ鞋トソノ需（モト）ムル物トヲ比較（ヒカク | クラベ）シテ易ヘ得ルコトナルベシ

英文原書 *First Lesson* の前半部分 “What a useful thing is money! If there were no such thing as money, we should be much at a loss to get anything we might want.” に該当するのは、『新書』では「夫銀之為用於天下也大矣哉、使天下而並無銀也。」で、『訳解』では「金銀ノ用ヲ世間（セケン）ニナスコトハ至便（シベン）ナルモノニテ苟モコレヲ欠トキハ人人何ヲ以テ銘銘（メイメイ）須用（シユイヨウ | イリイヨウ）ノ物品ヲ買ヒ得ヘキヤ」である。

網掛けで示した部分は、『新書』、『訳解』はこの原書を直訳した文の中間にそれぞれ説明文を加えたものである。『新書』は「上棟下宇」（易・系辭下）や「食前方丈」（孟子・尽心下）等の成語や多字句の定型を含む文言の文体で表現されており、名詞や動詞は基本的に単音節である。『訳解』はさらに『新書』が用いる難解な名詞、動詞を比較的平易なものに改め、『新書』では成語を含む四字句で表現された「上棟下宇」「重綱疊褥」「食前方丈」

「僮僕満前」を、それぞれ右訓・左訓を併用して「家屋ニ住(スマ)ヒ」「被衾(ヒキン|ヨギフトン)ニ寝(イヌ)ル」「多(オホク)ノ鼎俎(テイソ|ゼンブ)ニ飲食シ」「許多(アマタ)ノ奴僕(ドボク)婢女(ヒヂヨ)ヲ使令(シレイ|メシツカフ)スル」と表現している。また、英文原書の具体例は靴屋がパン、肉、ビールが欲しい場合のことを述べているが、パン、肉を『新書』は「膏粱、蔬肉」、『訳解』は「米粟、蔬肉」とするが、ビールに該当する語は欠落している。

(5) 第一章第三段

〈原〉 All this would be very troublesome. But by the use of money this trouble is saved. Anyone who has money may get for it just what he may chance to want. The baker is always willing to part with his bread for money, because he knows that he may exchange that for shoes, or for a hat, or for firing, or anything that he is in want of. What time and trouble it must have cost men to exchange one thing for another before money was in use!

〈新〉 乃所患者無銀矣；既有銀也。即山之珍、海之錯、亦如取而如攜矣。且市粟之人、誰不欲人以銀而易他之粟哉。蓋彼既有銀、不惟欲冠得冠、雖至難得者、無不可而得也。且吾人當未用銀之時、而思人生輾轉相易之難、奔馳到處之苦、

〈訳〉 カクノ如ク三方(サンボウ)乃至(ナイシ)四方(シホウ)替(カヘ)ヲ為サハ大(オホヒ)ニ手數(テカズ)ヲ掛ケ最(モツト)モ不都合(フツガフ)ノコトナリコハ全(マツタ)ク金銀ノナキニヨレリ既ニ金銀サヘアレハ唐茶(トウチャ|シナチャ)竺糖(ヂクタフ|テンジクサタフ)山海(サンカイ)ノ珍味(チンミ)モ咄嗟(トツサ|タチマチ)ニ辨(ベン)ズルコト疑フベキモアラズ抑(ソモソ)モ今日ニ當ツテ我輩共(ワガハイドモ)向(サキ)ニ未タ金銀ヲ用ヒザル時ノ手數(テカズ)不都合(フツカフ)ノ困苦ヲ考(カンガ)ヘ出セバ

英文原書 *First Lesson* の前段の第二段では、靴屋がパンを手に入れたいときにパン屋は靴が不要で帽子が欲しいとすれば、靴屋はまず靴を帽子屋で帽子と交換した上でパン屋のパンと交換する必要がある、という手間のことを

述べている。これを受けて、原書の第三段冒頭の一文“All this would be very troublesome.”(下線部)が、暗にお金が存在しないことの面倒のことを言っている。『新書』はそれを具体的に「憂慮するのはお金が存在しないことである」と言明している。『訳解』はさらに説明を加えた長文になっている。その続きの部分で英文原書は、お金の存在によって欲しいものをお金で手に入れられるということを一一般論として説明しているが、『新書』は手に入るものとして「山之珍、海之錯」を、『訳解』はさらに詳しく「唐茶(トウチャ|シナチャ) 竺糖(ヂクタフ|テンジクサタフ) 山海(サンカイ)ノ珍味(チンミ)」を例示する。英文原書はそれに続くパン屋の例で、欲しいものとして靴と帽子を挙げているが、『新書』は「冠」のみを挙げ、『訳解』はパン屋の例そのものを省略している。

『新書』の漢訳と和訳書『訳解』上編でそれに該当する部分の翻訳は、部分的には3.2.1で紹介したような比較的忠実に翻訳されている部分がある一方で、総じて3.2.2で紹介したようなパターンが多く、タイトルは英文原書と同主旨で、各章の本文は全体としては英文原書の大意を保ちつつ、個別の各文はほとんどが異なる表現に改められている。

4. 翻訳語として登場する漢字語

前章では『訳解』の翻訳が原書の大意を保ちつつ個別具体の表現については改められているところが多いことを指摘した。ここでは『新書』、『訳解』で英文原書 *First Lessons* の本文が比較的忠実に踏襲されている第二章を範囲として、英文原書の語彙が『新書』と『訳解』で直接訳出されているものについて見てみたい。英文原書 *First Lessons* の第二文“Go into the shoemaker's shop, and ask him why he does not make tables and chairs for himself, and hats, and coats, and every thing he wants.”について、英文原書→『新書』→『訳解』の順に挙げると、下線を付した箇所が、Go into→往→ニユキ、shoemaker→為屨者→鞋匠(クツシ)、shop→家→行(ミセ)、ask→問→問フ、why→何→何故ニ、make→為→製造、himself→自→貴公自身、every→百→凡百(モロモ

ロ) ノ、thing →物→物品、のように訳出されている。二重下線を付した部分“tables and chairs for himself, and hats, and coats”については『新書』は衣類4点を各漢字1字の四字句“枱椅衣冠”で表現する。『訳解』は品数を減らして「椅子(イス) 帽子(バウシ)」としているが、このように英文原書、『新書』で挙げられているものを増減している箇所は多い。

さらに、『訳解』で二字以上の漢字語で訳出されているもので、主だったものは次の通りである。

- 1) “the shoemaker” → 「為履者之家」 → 「鞋匠(クツシ)ノ行(ミセ)」
- 2) “the tailor” → 「為椅者」 → 「椅子匠」
- 3) “the hatter” → 「為冠者」 → 「帽子匠」
- 4) “the steam engine” → 「火車」 → 「汽車」
- 5) “our back country” → 「合省國隣邦」 → 「彌利堅合眾國ノ近隣」

英文原書の語彙に対して、1)から3)について、漢訳書の『新書』は「為～者(～をつくる者)」として説明的な表現にとどまっているが、『訳解』は「製品+匠」の固定化された表現で統一されている。4)については、英文原書の“the steam engine”はそもそもが機械としての「蒸気機関」であって「車」ではないが、『新書』、『訳解』はいずれもより読者に馴染みがある乗り物として表現しており、『新書』は中国語としての「火車」としているが、『訳解』はこれを日本語の「汽車」に改めている。5)は英文原書でアメリカの隣国を指しているが、アメリカで出版されたものなので当然“our back country”としている。これを『新書』は「合省國隣邦」とし、『訳解』は「彌利堅合眾國」とする。これらは英文原書の語彙を直接翻訳しているものであるが、これ以外に『新書』、『訳解』の第二章には、英文原書の語彙を翻訳したものではないものも含め、以下のような二字以上の漢字語が使われている。『新書』は中国語の文言で書かれているために基本的には二字以上の漢字語が非常に少ない。章の文章量の差こそあれ同一内容に対して『訳解』で使用されている二字以上の漢字語が非常に多くなっていることが一目瞭然である。

〈新〉衣裳、往來、屋宇、火車、械器、器具、規矩、漁舟、空樹、君子、啓

開、湖海、交易、合省國、山林、車馬、精通、智慧、都會、百工、風箱、方圓、妙法、野人、隣邦

〈訳〉**本文** 一心不亂、我黨、開化、開明、確乎、茅ノ屋、丸木船、器械、汽車、規矩、貴公、許多、漁舟、漁獵、緊要、交易、工人、工夫、江湖、才氣、斬截、時間、自身、自分自身、篠矢、柴ノ戸、就中、住居、所謂、所用、小童、梢弓、賞美、城中、職人、新發明、人民、世間、制品、精巧、精通、製造、拙陋、千職萬工、相互、村落、多少、耽閣、智慧、著名、超絶、適稱、必定、百工、品物、不便、夫夫、富瞻、封俺、物品、平生、方圓、邦國、帽子、帽子匠、凡百、妙法、野人、野蠻、容易、利便、倚子、倚子匠、學問、彌利堅合眾國、從事、獸皮、獵器、筵席、證據、讀書、鐵匠、鐵道寮、鞋匠

訳者曰ク 休息、工業、主意、生産、物質、物品、一柳一笏、一國一處、一變、運去、家屋、海濤、器什、許行、鋸錐、建造、互市、交易、交際、厚意、工業、工人、幸福、左耕右築、材木、三大業、三變、産出、産物、四海一家、支那、自然、嫉妬、需要、充足、所賜、諸物、障礙、職業、真樂、神農、親密、人間、人作、瑞穂、世界、世上、成功、生活、生産、精巧、製造、切用、千里、全國萬國、相當、造物者、其他、大工、鍛冶屋、智識、天竺、天造、土地、刀身、東奔西馳、到底、農工商、配分、舶來、繁昌、彼我、彼我兄弟、百工、百工萬事、品物、物形、物所、分課、分業、文明、米粟、便利、紡織、民俗、名産、名物、綿糸、模様、木棉屋、野蠻戎狄、有無、融通、亞細亞、變化、歐羅巴、烟艸、絨緞、萬里、萬國、關河、陋習

5. 「訳者曰ク」について

和訳書の『訳解』には、本文に続いて「訳者曰ク」という訳者による解説が付されている。孫(2015)は「和訳版の内容から見ると、各章の本文の後に、「訳者曰ク」という書き出しから、訳解、つまり注釈説明の部分が綴られている。分量として、各章こそ相違はあるが、おおよそ3分の1程度のも

のが多い」と述べる¹¹⁾。さらに孫(2015)は「この部分を通して訳者の見解が示され」(同前)とも述べるが、これは必ずしも訳者がオリジナルの見解を記述したということではなく、孫(2015)が『訳解』「例言」の一節「毎篇譯者ノ言ヲ附録スルモ全ク我輩自己ノ憶説ニ出ルニ非ズ概ネ空蘭德氏義里士氏ヲ首トシテ西國先哲ノ議論ヲ纂輯シ經濟致富ノ道ニ於テ相發明シ易カラシメンコトヲ期スル譯者ノ婆心ナリ」を引用しつつ「訳注は訳者の憶説ではなく、明治初期に流行っていた経済書を参考にして行われたことが窺える」と述べるように、部分的には以下に示すように同時代の経済書からの引用が見られる。ここで言うところの経済書とはオリジナルではなく西洋の経済書からの翻訳のことで、「例言」が言及する「空蘭德氏」とは、アメリカ人牧師にして教育者であるウェーランドのことであり、その著作 *The Elements of Political Economy* は小幡篤次郎の『英氏経済論』、何礼之(1872-1874)『世渡りの杖』(以下：『世渡』、下表〈世〉)等の翻訳で明治初期に大いに用いられている。以下のように、第二章の「訳者曰ク」の冒頭は何礼之『世渡』の20丁オモテから始まる一節を参照したであろうことが窺える。

- (1) 〈訳〉凡ソ物品ヲ生産スル為ニ人人休息セズシテ工業ヲ勤ムル主意ハ物質ノ變化物形ノ變化物所ノ變化此ノ三變中ノ一變ヲ為スコトナリ
〈世〉凡物品を生産するが為めに人々休息せずして工業を勤むる極意ハ畢竟前にいえる三変中の一変をなす事なり
- (2) 〈訳〉コレヲ名テ農工商ノ三大業トイフ或ヒハ其二業ヲ兼ルモノアリ
〈世〉これを農工商の三大業といふ多くハ其二業を兼ねるものなり農民麦を耕しこれを市に運び賣るときハ別ち二業を兼勤すといふ
- (3) 〈訳〉然レトモ人人誰ニ限ラス右ノ一業中ニ生活職業ヲ營ム然レトモ人人誰ニ限ラス右ノ一業中ニ生活職業ヲ營ムソノ上ニ就テ又夫夫工業ノ名ヲ分ツ
〈世〉然れども人々右の一業の中にて始終仕遂る所に■ひてその工業の名を分つなり (筆者注：■は判読不能)

11) 孫(2015: 241)。

- (4) 〈訳〉 譬へハ材木ヲ鋸リ鐵ヲ鍛ヒ糸ヲ紡ム概シテ工人トイハズ大工トイヒ鍛冶屋トイヒ木綿屋トイフ
〈世〉 譬へバ刀劍を鍛治し家屋を建造し或ハ木綿を紡ぐ者何れも工業に属すれども之を一般に工人とハ謂う事なくして鍛冶屋といひ大工といひ木綿屋といふが如し

以上のように『訳解』第二章「訳者曰く」冒頭の文章は『世渡』のそれと酷似している。『世渡』は1872年から1874年にかけて出版されており、『訳解』は1875年の出版であるから、何らかの形で参照されたことは想像に難くない。但し、続きの「而シテ鍛冶屋ハ鋸錐ヲ製造シテ家屋ヲ建造セズ大工ハ家屋ヲ建造スレトモ綿糸ヲ紡織セザル類ヒ惣シテ一人一業ヲ數人二分課スルモノアリ」の一文からは『世渡』の当該部分の続きとは異なった内容になっている。さらに『訳解』上編の他章の「訳者曰く」を『世渡』のその他の部分や、同時代の経済学翻訳書である小幡篤次郎(1873)『英氏経済論』、神田孝平の『西洋経済小学』で章立てが同じ内容の部分と比較対照したところ明らかな重複は見られないことから、上述の各書を参照しつつ独自に執筆された部分が多かったと考えられる。

6. 漢語へのカタカナによる訓

『訳解』本文と注釈部分である「訳者曰く」で使用されている漢語(仮名混じりの語を含む)には、一部は縦書きの漢語の左右両側(両訓)、一部は右側(右訓)のみ、一部は左側(左訓)のみで、カタカナによる訓が付されている。第二章について本稿が集計したところでは、本文では両訓：8箇所、右訓：73箇所、左訓：1箇所の計82箇所、「訳者曰く」では両訓：2箇所、右訓：71箇所、左訓：1箇所の計74箇所、第二章全体では両訓：10箇所、右訓：144箇所、左訓：2箇所の計156箇所となっている¹²⁾。

12) 王(2016)は全編の付訓を計1440箇所(両訓：97箇所、右訓：1334箇所、左訓：9箇所)とし、第二章「百工ノ交易スルヲ論ス」は計93箇所(両訓：10箇所、右訓：82、

訓が付されるのは必ずしも翻訳語としての漢語とは限らず、動詞や文法機能を担う接続詞、副詞など多岐にわたる。また、両訓の場合、本文では「獵器(レウキ|カリノドウグ)」「梢弓(サウキウ|キエタノユミ)」「篠矢(セウシ|シノタケノヤ)」「精通(セイツウ|ジヤウヅ)」「耽閣(タンカク|サシオキ)」「村落(ソンラク|イナカ)」「超絶(テウゼツ|スキコエル)」「確乎(カクコ|キツト)」「訳者曰く」では「紡織(バウシヨク|アミオル)」「釘(テイ|トトメズ)セズ」であり、全て右が音読み、左が和語による訓読みとなっている。左訓のみは計2例で、本文では「城中(マチ)」「訳者曰く」では「野蠻戎狄(エビス)」で、やはり左が和語による訓読みという法則に当てはまる。一方、右訓の計144箇所については、例えば「規矩(キク)」「方圓(ハウエン)」は文字通りの音読みであり、「斧(オノ)」「鋸(ノコギリ)」は和語の訓で、「江湖(セケン)」「鞋匠(クツシ)」は漢語に同義の和語の音読みの訓を付している。他にも「コレ等(ラ)」「費(ツイヤ)ス」「譬(タト)へ」といった事例があり、限られた調査範囲では訓の付け方に一定の法則は見出せない。

おわりに

英文原書 *First Lessons* の漢訳書『新書』に訓点を付して出版された訓点本は、訓点がある以外は完全に漢訳書『新書』そのものであり、一定以上の漢文の素養がある知識階層でない一般読者にとっては非常に難解であったはずである。未だ国内に経済学の基礎が定着していない状況で経済を説明するために、『訳解』は直接経済学の学術用語を用いるのではなく、多くの二字以上の漢字語で、かつ日常的に使われていたと思われる語彙が積極的に用いられている。原書が出版されたアメリカの社会状況との差異も念頭に、逐語訳で十分に読者に伝わらない箇所は国内の読者が理解しやすい事例に置き換え

左訓：1箇所) とするが、集計の基準を明示しておらず、本稿の集と数字が一致しない。

られている。また、何礼之『世渡の杖』等の同時代の著作にも見られる左訓で、漢字語付された同義の和語のルビも内容の理解に有用であったはずである。訳者による補充の解説としての「訳者曰く」は、部分的には同時代先行書からの引用が見られるが、基本的には『訳解』独自の構成であり、何よりもこの「訳者曰く」の説明に二字以上の漢字語が極めて多用されていることは特徴的である。

参考文献

- 王斌 (2016) 「明治初期における経済学翻訳の一齣—漢訳書『致富新書』をめぐる—」
日本通訳翻訳学会『翻訳研究への招待』No. 15.
- 小澤三郎 (1939) 「支那在留宣教師 J. L. ネヴィアスと日本との関係—神道總論、天路指南の著者—」基督教史研究会『基督教史研究』第六冊.
- 呉義雄 (2011) 「鮑留雲と《致富新書》」『中山大学学報 (社会科学版)』2011年第3期第51巻 (総231期).
- 孫建軍 (2015) 『近代日本語の起源—幕末明治初期につくられた新漢語—』早稲田大学出版部.
- 中島耕三 (2015) 「教育と伝道の使者—S. R. ブラウン博士—」『明治学院大学教養教育センター附属研究所年報』2014.
- W. E. グリフィス著・渡辺省三訳 (1985) 『われに百の命あらば—中国・アメリカ・日本の教育にささげた S. R. ブラウンの生涯—』キリスト新聞社.
- Casalin, Federica (2006) *Some Preliminary Remarks on the ZhibuXinshu* 近代東西言語文化接触研究会『或問』第11号.

参考資料

- 鮑留雲 (1847) 『致富新書』粵東香港飛鵝山書院蔵版.
- 神田孝平 (1868) 『西洋経済小学』(国立公文書館デジタルアーカイブ).
- 平田宗敬校 (1871) 『致富新書』東京書肆鈴木喜右衛門 (翻刻版、東京大学経済学図書館所蔵準貴重図書デジタル資料).
- 何礼之 (1872-1874) 『世渡りの杖—一名経済便蒙卷之一—』(国立国会図書館デジタルコレクション).
- 小幡篤次郎 (1873) 『英氏経済論』再刻 (慶應義塾大学図書館蔵).
- 中島雄・讚井逸三 (1875) 『致富新論訳解』(全三巻) 松柏堂 (国立国会図書館デジタルコレクション).
- McVickar, John (1825) *Outlines of Political Economy being a Republication of the Article upon that Subject Contained in the Edinburgh Supplement to the Encyclopedia Britannica*, Wilder &

『致富新論訳解』（1875）が経済を説明したことばについて

Campbell.

McVickar, John (1837) *First Lessons in Political Economy, for the use of Primary and Common Schools*, Common School Depository.

McVickar, John (1846) *First Lessons in Political Economy, for the use of Primary and Common Schools 7th Edition*, Saxton and Miles School Book Publishers.

塩山正純 Shioyama Masazumi 愛知大学教授 専門：中国語学